教育に関する考えや実践について

南部　徳良

体当たりをしてくる！黒板消しを投げつける！ーーーーー。

文部科学省が先般公表した児童生徒の問題行動調査で、小学生による暴力行為の深刻さが浮かび上がった。

歯止めがきかない子。口より先に手が出る子。暴力の矛先は、子供同士だけでなく、教師にも向いているという。いったい教育現場で何が起きているのか？　手加減なく体当たりする子。気に入らないことがあると机を投げる子。いきなり隣席の子をたたくなど、授業を妨害するケースもあるという。暴力をふるう小学生は上級生になるほど増えるという。

暴力を振るった児童数全体の 6 割強を５・６年生で占めているという。こうした状況について、「自由や個人を重んじて子供を一人前扱いする風潮が強まり、難しいこと、つらいことに挑戦させる機会も減った。教師と対等だとの雰囲気が広まり、指導に我慢できず暴力で反抗してしまう。子供同士でも欲望が抑えられずに、すぐ手を出してしまう」と教育学者は分析している。

怒りや悲しみ、不安や憎しみなどの感情は誰もが抱えている。社会で生きるためには、そうした感情をコントロールしながら他者と向き合う力が必要だ。暴力行為の増加は、そうした感情を言葉で処理できず、そのまま他者にぶつける傾向が一段と強まったことを示している。そうした力は、他者とかかわる体験を通してしか育つものではない。小さいときに怒りなどの感情を他者にぶつけ、それを親など他者に受け止めてもらう体験を通して、次第にそうした感情と向き合えるようになる。

いくら道徳教育を強化しても、その土台となる共通の基盤が育っていなければ、規範を説いてもピンとくるわけがない。

少子化や地域の崩壊で、失われた子供の対人体験の機会や場をどうつくるか、学力問題以上に取り組む必要がある。

私は生涯学習 1 級インストラクターの資格を修得し、地域自治会の生涯学習奨励員や青少年育成推進員として社会教育を地域で推進している。地域子供会の育成推進員として、放課後の学童保育をサポートしている関係から、小学校児童と接する機会が多い。地域の公民館で子供たちとカルタ遊びをするときは、ただゲームに興ずるだけでなく、上毛かるたを教材にして、郷土の地理・歴史を学ぶ。百人一首を教材にして、低学年児童にも、韻を踏んで節を付けてゆっくり読み下す。低学年児童には、歌の意味はわからなくても、美

しい日本語にリズムをつけて体感させることが、きっと将来役に立つと思う。

今の子供は、日本語の語彙がまことに貧困（ボキャ貧）で、敬語も使えず、何を聞いも「すごーい」「おいしい」のほかに自己表現の言葉を持たないといわれている。しかし、ボランティアの寺小屋教育（放課後の学童保育）では、限界があり、学校教育の中で日本語の言語学習を強化してほしい。

「国家の品格」の著者で数学者の藤原正彦教授は、「幼少のときから、漢文や和歌など、美しい日本語を素読する習慣が、独創性や品格を身につけることにつながる。学校は悪しき平等主義をやめ、子供たちに名文のリズムを体得させて、日本の文化や伝統を知る楽しみを教えるべきだ」と述べている。

もうひとつ義務教育で取り上げてほしい教科がある。

現在の日本では、日本人を創っていく、日本人を育てる教育も、群馬県を創っていく、群馬県民を育てる教育もなされていない。

日本人であれば、国籍は日本であり、海外へ行くと抹茶の味や桜が恋しくなる。だが、日本で生きていく上では、郷土がその人の土台となるのではないか。

自分が生まれ、はぐくまれた郷土に誇りを感じられなければ、その集合体である国に誇りを感じるはずがない。郷土を愛する人間を育てることが、よき国家を創ることにつながるのである。

その具体的取り組みとして、義務教育で郷土愛教育を取り入れて欲しい。小中学生に、全国一律の教科書と並行して、県単位の教科書で、郷土の偉人や文化を徹底的に教えるのである。

例えば、幕末から明治維新にかけての激動期、本県にゆかりある先人たち、小栗上野介・柏木義円・内村鑑三。上毛かるたにうたわれている、平和の使徒・新島襄。老農船津伝次平。和算の大家・関孝和。歴史に名高い・新田義貞。天下の義人・茂左衛門。沼田城下の塩原太助。誇る文豪・田山花袋。他に郷土の詩人で作家の萩原朔太郎。詩人の山村暮鳥。洋画家の山口薫。歌人で文化勲章受章者の土屋文明等を取り上げ、先人たちの残した業績足跡を学ぶのである。

今秋、私は地域自治会の生涯学習奨励員として、上野三碑（金井沢の碑・山ノ上の碑・多胡碑）巡りのボランティアガイドを務め、史跡・古墳の解説、案内をした。地域住民が多数参加し好評だった。地域の親達も、郷土の歴史探索には関心を持っていることが分かった。

私の教育に関する三つ目の課題は、最近新聞紙上やテレビで問題になっているモンスターペアレントである。

過日、県生涯学習センター主催の家庭教育支援研修講座が開かれ、臨床心理士の諸富祥彦教授が「モンスターペアレントとその対応」について講演した。

私は、心理カウンセラー、産業カウンセラーの資格をもって、ボランティアでカウンセリングをしているので、講演を聴きに行った。

講師は講演で、エンカウンターと呼ばれる人間関係づくりの手法を実践した。

「子供に嫌われるのが心配でこびを売る親が増えてきた。これがモンスターの基本」と話し、親の学校への過剰な要求を実例を挙げて紹介した。

家庭教育では、否定的な言葉が否定的な心を生み出すとし、「ごめんね」「お願い」「ありがとう」の言葉が言えるなど、四つのポイントの実践を呼びかけた。

私はカウンセラーの資格を活かし、高崎市中央公民館で週一回、高崎市民の悩みごと相談カウンセリングをしている。

子供を持つ親の教育に関する相談を受けることがあるが、子供を教育するには、まず親の教育を・・・というのが私の持論である。

新聞報道によると、静岡県では「モンスターペアレント」に苦慮　就学前に親を“指南”という見出しで次のような記事が掲載されていた。

子供を教育するには、まず親の教育をー。静岡県教育委員会は、来春小学校に入学する児童の保護者全員を対象に、子供との接し方、家庭でのしつけなど、親としての心構えを説く「親学講座」を開講した。一昔前なら家庭や地域で自然に学んだ親としての“基本”を知らない若い世代が増えているためだ。学校に理不尽な要求を繰り返す「モンスターペアレント」と呼ばれる親に各自治体の教育委員会や学校が対応に苦慮する中、子供の就学前に親と家庭のあり方を見つめ直し、問題が発生する前に取り組む対策の一つである。

親学講座のテーマは、「子育ては親育ち」。講師は「子供は親の背中を見て育つ。親の生きる姿が、何ものにも替え難い教育」と持論を述べ、「言葉は人格そのもの。日常生活での言葉を大切に」「全ての教育は食事の場で行える」と、家庭で心がけるべき“子育てのポイント”を示した。（産経新聞首都圏版 2008 年 10 月 8 日朝刊の記事より）

少子化が進行する現代、身近で幼い子供と接した経験がなく、親になる訓練をしないまま子供を持つ親が少なくない。地域の中で子育てを学ぶ機会もほとんどない。

そのためか学校に非常識な要求を突きつける「モンスターペアレント」と呼ばれる親の

存在が社会問題となっている。

群馬県教育委員会も他県を参考にして、親としてのあり方を学ぶ機会（親学）を自然な形で設けて欲しい。子育てについて学ぶ機会はいろいろ提供されているが、親自身の育ち方を教わる機会はほとんどない。静岡県教育委員会で実施している「親学講座」の大きな特徴は、新１年生の保護者全員を対称にした事だ。新１年生に義務づけられている就学時健康診断の待ち時間や入学説明会に講座を組み込み、保護者全員が参加できるよう配慮した。又、講師には地域の実情に詳しい地元の人材を学校ごとに選任、来年３月にかけ、静岡県内の全公立小で順次開講するという。親に親であることの自覚をもとめ、親がモンスターペアレント化することを未然に防ぐ効果も期待できる良い企画だと思うので、群馬県でも是非見倣って欲しい。

今回、学校教育・家庭教育・社会教育の三つの視点から、私の実践体験も踏まえ、教育に関する考えを述べさせていただきました。